

書評

『絶滅できない動物たち—自然と科学の間に繰り広げられる大いなるジレンマ』

M.R. オコナー著／大下英津子訳 ダイアモンド社
2018年9月刊 2,200円（税別）（408項）

刺激的な邦題だが、悪くないのではと思った。「絶滅できない」との表現は、「絶滅はよくないことだ」「絶滅から種を救うのはよいことだ」（「はじめに」p. iv）という、私たちに染みついた素朴かつ教条的な考えに疑問を呈する、本書冒頭での表明に対応するものだ。著者の基本的なスタンスはもちろん「種を守りたい」なのだが、生態系を管理する諸々の試みについての見方は懐疑的なものである。そうした態度に至るまでに経た、現場や専門家の取材、著者が感じたことの記述等が本書の中核をなしている。通底するのは、人類が地球規模で環境に影響を及ぼす時代＝人新世における、保全をめぐる倫理的ジレンマだ。いずれすべての種は絶滅するという巨視的視点を持ったうえで、現在の私たちが何をなすべきか、熟考すべしと訴えかける本である。

本書の白眉は、気が滅入るような困難で矛盾含みの事例の数々に寄り添う視点だ。困難や矛盾と言っても、実に多様である。例えば、種を絶滅から救おうと飼育下繁殖に成功したのはよいものの、飼育下に適応してしまって野生への再導入が困難になる、あるいは、そもそも復帰させるべき環境がなくなってしまうというジレンマ。「交配種はどうすべきなのか？場合によっては殺すべきなのか？望ましくないけれども遺伝子を守るために最終手段として交配させるべきなのか？」「そもそも守るべきは種なのか？遺伝子なのか？それ以外のものなのか？」「ところで種の定義は結局どれにするのか？進化は数十年で起こったりするが？」など、交配種や亜種における境界線の問題や交配種に対する（根拠に乏しい）心理的抵抗の問題。人間が生態系の管理を試みるにしても、そもそも予測不能なことが多すぎるという問題。「巻き込まれる個体はどうなるのか？ときに環境や種のために犠牲になるべきなのか？」という、動物倫理と環境倫理の整合性の問題（そう明記されていないが）。保全をめぐる問題がいかに多岐に渡り、複雑に絡み合っているか、評者はここにまとめようとしてよくわかった。もちろん、これでも全てを挙げられているわけではない。

著者が絶滅と保全について考えを深めるようになったのは、米国ブロンクス動物園の陸生飼育器テラリウムの中で「まるで病院で生命維持装置につながれた患者」（「はじめに」p. ii）のようにして生きる、タンザニアの固有種キハンシヒキガエルの姿を目にしてからだったという。

その後タンザニアを訪ね、国内政治や開発経済、人種間の格差等について話を聞かされたのち、ついにはカエルたちの故郷である熱帯雨林を訪れた。しかし、最終的には、本当に彼らを保護することが正解だったのか、疑問に感じざるを得なかったと言う。野生ではいったん絶滅したキハンシヒキガエルは、とある滝のふもとのごく狭いエリアにしかそもそも生息していなかった。電力供給が不安定だった90年代のタンザニアで、世界銀行の融資を受けたダム建設のためのアセスメントの際に発見された新種なのである。環境保護団体からの圧力等の末に世界銀行は保護の姿勢を決め、カエルたちは米国へ運ばれて飼育下繁殖がされてきた。後に個体群が再導入され、成功例として注目を集めたが、カエルたちは人工スプレーシステムの中で生き続けるほかない。また、常に飼育下からの個体を補充してやる必要もある。一体なぜそんなことに多額のお金を？もっと他のところに融資をしてくれてもよいのでは？と、最貧国のひとつであるタンザニア国内において、保護が必ずしも歓迎されなかったのは無理からぬことなのだ。

原著のタイトルである「Resurrection Science」は、直訳すれば「復活の科学」となる。これは、DNAから種を「復活」させること＝「脱絶滅」のことを指している。登場するのは、20世紀初頭に人類が絶滅に追いやってリョコウバトを蘇らせようという話だ。近縁種であるオビオバトの始原生殖細胞のゲノムを編集し、それを胚に注入するのである。すでに民間企業によって、キメラや代理母を用いた繁殖技術が開発されている。そうした企業らと組んで「脱絶滅」を実現しようとしているのは、子どもの頃からリョコウバトに魅せられてきた、ベン・ノヴァクという若手研究者である。プロジェクトは彼の強い情熱によって進められているが、冷ややかな視線を向けられることも多いという。批判のひとつは、ニュージャージー工科大学教授エリック・カツツが言う、「脱絶滅」させられた種は「存在論的に見ても、元のものとは違う。元のものとは、存在としても、本質的にも違っている。新しい種は自然の種ではない」（p.285）というものだ。リョコウバトはもういないし、これからはもういない。マンモスをはじめ、今後多くの種が、単なるノスタルジーやロマンによって「復活」させられようとするのではないか。そして、「脱絶滅」が可能ならば絶滅は大した問題ではない、ということになりやしないかと心配しているのである。「新しい種」がどういう行動を見せるのかということも、再導入という面では懸念事項だ。一方、バイオエンジニアリング技術によって人間が自然を管理することについてどう思うかと問われたノヴァクはこう言ったという。「僕たちが現在の世界の創造主になるっていうのが、いかにも操っている印象で嫌だっていう人がいま

すけど、実際に僕たちはもうとっくに地球を形作っているんです！」(p.276)。本書には幾度となく、人間が干渉しない「手つかずの自然」を理想とすることへの疑問の声が登場する。それは、ほとんどの場合、期せずしてすでに私たちは絶滅だけでなく進化にも大いに影響を与えてしまっている、という現状認識ゆえである。現在、大きく問われているのは、人間が進化に及ぼしている否定できない影響を認識したうえで、その種が今後の環境変化などを生き延びていけるよう、望ましい方向へ進化を操作すべきか、ということだという。「指向性進化」とか「規範的進化」と呼ばれるもので、すでに「無計画かつ無意識のうちに」進行してしまっているのだから、せめて「きちんと考え抜かれた方法」を取るしかないだろう、というのだ(応用進化生物学という分野を立ち上げたスコット・キャロルによる。「はじめに」p.x)。

本書には8つの章が含まれているが、具体的にここで紹介するものを選ぶのは難しかった。なぜなら、一つ一つの話が入り組んでいるうえ、それらは本書が最終的に問題とすることや、結局のところ何が重要なのかということを端的に示してくれているわけではないからだ。だが、そうした掴みづらさによってこそ、保全に関する問題の多くは科学的事実の問題ではなく、私たちの価値判断をめぐる問題であり、待ったなしの倫理の問題であるということを読者は突き付けられる。このことを明言しているのは、保全遺伝学者のジョージ・アマーとである。「(保全は)人間による倫理の構築物だ。それに対して100パーセント科学的でありたいというのであれば、まず『科学的な質問とは?』というところから始めないと。ゴリラがいる世界といない世界と、どちらがよいのか。これは科学ではない。価値観の問題だ」(p.203)。ただ、アマーも著者も、「価値観の問題」を、答えを出すべき規範の問題というよりは、各人における「ひと揃いの好みや信念への固執」(p.203)にすぎないものと捉えているようである。著者に関して言えば、理論としての(これまでの)環境倫理の挫折を知ったことや、本当に人を動かすのはごく私的な思いしかないと感じたことが、そうしたスタンスを取る理由かもしれない。強い動機の源泉というのは、ごく個人的な情熱と結びついたものでしかあり得ないのだろうということは、本書を読んで印象に残ることの一つだ。

相対主義的な態度を崩さず、結論の提示に慎重な著者は、終わり近くで、実効性には疑問を呈しつつも、オブジェクト指向存在論という新しい思想的潮流を紹介している。詳細な説明は省くが、これが環境倫理と接続すると、概ね、人間中心主義を脱するとか、人間／自然という二元論を越えて行く、という考え方になるようだ。つまり、「人間」が客体化できる「自然」と

いうものはそもそも存在しない、ということになる。どこまでが「自然」で、どこからが「自然」でないのか、明確な線など引けない、ということは、哲学的な概念としてのみならず、現実的・日常的な事象の中でも認識され、実感されるようになってきていると思う。本書を通して、現場のリアルと人々の葛藤を知った後、環境倫理や人新世における思想についての知見を深めれば、新しい時代の保全に役立つ視点が得られるかもしれない。何はともあれ、一度立ち止まって考えたほうがいいのではないか、というのが著者の基本的態度だ。保全に限らず、環境や生物に関する倫理的な難しさを感じている人には、是非読んでみていただきたい。

(京都大学野生動物研究センター 櫻木敬子：
hrk.sakuragi@gmail.com)